永井龍男 織田作之助
井上友一郎 井上靖 集

現代日本文學全集 81

永井龍男
井上友一郎
織田作之助
井上靖

集

現代日本文學全集

81

筑摩書房版

現代日本文學全集 81

永井龍男
井上友一郎
織田作之助
井上靖 集

昭和三十一年十二月十五日 印刷
昭和三十一年十二月二十日 發行

著者
永井龍男
井上友一郎
織田作之助
井上靖

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
(電話)東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版 株式會社精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 美行製本有限會社

永井龍男集　目次

黒い御飯……五
繪本……七
手袋のかたつぼ……九
往來……一八
『あひびき』から……二四
胡桃割り……三二
朝霧……三七
青電車……四七
うねり……五四
白い犬……六〇
風……六七
そばやまで……七二
狐……七七
白い柵……八七
まつすぐな釘……九二
小美術館で……九七

井上友一郎集　目次

殘夢……一〇三
受胎……一三八
千鳥の話……一五〇
菜の花ざかり……一六〇
湘南電車……一六七
負け犬……一七五
うたよみ……一八三
日本ロォレライ……一八八
銀座川（序章）……一九八

織田作之助集　目次

夫婦善哉……二〇九
木の都……二二七
螢……二三三
六白金星……二四〇
アド・バルーン……二五二
世相……二六八
競馬……二八八

井上靖集　目次

獵銃……二九七
闘牛……三二一
漆胡樽……三五〇
ある僞作家の生涯……三六一
姨捨……三八一
永井龍男の「はにかみ」（井伏鱒二）……三九三
井上友一郎（伊藤整）……三九七
哀傷と孤獨の文學（宇野浩二）……四〇〇
井上靖論（吉田健一）……四〇七
解説……四二一
年譜……四一八

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

永井龍男集

おぼえて

歌は

つまらない

永井龍男

黒い御飯

小學校も卒へる事が出來ずに、小さい時から工場通ひを仕續けてきた兄が、工場の歸りにカバンを買つて來てくれた。A社の給仕に出てゐる二番目の兄がそれへ名前を書いてくれる。

さうして明治何年かの四月一日、母はいそいそした私の手を引いて小學校の門をくぐつた。私はきつと、次兄の着古した紺飛白の縫ひ直したのを着、新しいごわごわの袴と、新しいカバンと新しいぴかぴかする帽子をかぶつて、然し、傍の者から見た私の姿は、袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンに下げられてゐたに違ひない。きつとその日は好い天氣であつたらう。

父は體が弱かつた。八九年も、同じ印刷所の校正係をつとめてゐた。その間に、他の仲間達はどんどん好い位置を占め、社も發展して行つた。しかし父はいつもガラス戸のはまつた寒い、暑い校正室の中で、赤い筆を持つてゐた。

――私はよく其處へ、夜業のある時などにお辨當を屆けに行つた。蚊をつぶした新聞紙のやうになつた、校正刷りが澤山あつて、印刷所特有の、鉛や、紙や、インキの濕つた臭ひが、薄暗くなつた狹い室の間にただようてゐた。

明り取りのすりガラスが鉛色に明るく、夕暮のもつ蒼さに透いて、やせた父の頭の上に四角くあつた。

「とうさん、ほんの一寸しか箸をつけなかつたんだが、お前たべないか」

或る時（あるひは二三度ばかり）父はさう云つて、晝に辨當屋からとつた辨當の殘りを差出したことがあつた。平生私は、父をけちんぼだと思つてゐた。父がけちんぼなのを考へると悲しくなることもあつた。薄暗くなつた室の内で父の視線と私の顏が會つた時、私はそれをよけて不機嫌に云つた。

「たべない」

私は憂鬱になつた。どうしてこんなことをする父であらう。殘つたものなんか、さつさとやつて了へばよいのに。私は横町の家へ歸つてからも、つまらなかつた。

家からその印刷所へ行く迄の十五分ばかりの道に、其處には活動寫眞などもあるのだが、五日おきに緣日がたつた。恰度、お辨當を持つて行く日が緣日であつたことがある。緣日には、近所の子供達が申し合せたやうに、二錢づつ貰ふのが例であつた。私も、晝間のお小遣を貰はないかはりに二錢づつ貰つた。その日はお辨當を持つて其處へくる迄、緣日を忘れてゐた。無論、晝間の分はつかつた私は、はつとした。母はもう一錢しか呉れない。皆が二錢づつ持つてゐるのに、自分には一錢しかないといふことが、どんなに寂しいことであらう。

「父にねだつて見よう」

道を歩きながら私は考へた。それは可成云ひにくい望みの無いことだつた。父はけちんぼだつたから。包みからお辨當を出して、もぢもぢしてゐたが、思ひ切つて云つて見た。父はがま口から二錢銅貨を出して、私の手の平へのせてくれた。あの大きな重い二錢銅貨を。（こんなことのあつたせゐであらうか、今でもあの不便な二錢銅貨は、ひと昔とでも云つたやうな懷しい重みを持つてゐるやうに感じられる）さうして、その夜は大盡にでもなつた氣で緣日を歩き廻つた。

父は小心な、曲つた事の出來ない（しかし道で拾つたぽつちりの金ならば、そつと了つておくやうな）ほんたうの小人であつた。不孝者の私は父を吝嗇な人と思つてゐた。しかし、父はそれより仕方なかつたのだ。父は咳が出た。それには永い間藥がいつた。それに、私達のやうな暮しをしてゐる者には、明日の保證が一寸もないのだ。殊に父のやうな病弱な人にはその感じが強かつたであらう。

「もし明日にでもどうかしたら……」

何事に對しても先づ父の頭へはさうした言葉がひらめいたであらう。父は少しづつ、少しづつ、恥かしい程少しづつ貯蓄をした。

頬のこけた、髭をはやした顏、さうして自分

で染直した外套を着て、そろそろ、そろそろ、下駄を引摺るやうにして歩いてくる父の影が、私の心へ蘇へる。それは、もう可成病ひが重くなつてからの姿だ。父はいよいよ動けないといふ日まで勤めた。

虎ちやんといふ、いつも頓狂なことを云つて笑はせる私の友達の八百屋の子は、私達の仲間の前で突然こんなことを云つたことがある。

「たつちやんとこのお父つあん偉いんだつてさあ！」

「何故？」

仲間達の顔と顔を見比べる虎ちやんの惡戯な顔を、私は薄氣味惡く、そして間が惡るげに見詰める。

「だつて髭をはやしてゐるんだもん！」

さう云つて虎ちやんは、げらげらと高笑ひをする。

「ちえつ！　髭をはやしてゐるもんはどうして偉いの、えつ虎ちやん」

私は激しい恥辱を感じて突掛つて行く。すると他の仲間が、とぼけた事を云ふ。

「あたい髭をはやした電車の運轉手を見たことがあるよ」

さう云ふ私達の、子供らしい皮肉のまじつた會話は、私の父が大儀さうに社から歸つてきて、私達や仲間の傍を通つて行つた跡の、夕暮の中で交されたやうな氣がする……。

然し、餘り父の事を語りすぎた。

その明治何年かの四月一日の夜、私達一家は御膳をとり圍んでゐた。話題は私の初登校のことであつたらう。父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしてゐた。「御屋敷の御婆さん」と母達に呼ばれてゐる、昔御殿女中をしてゐた養母に育てられた父は、醉ふと餘計に切口上になつた。私は私が一家の内で大變幸福者であることや、從つて一生懸命に勉强しなければならないこと、皆の恩を忘れてはいけない事などを、說き聞かされて涙ぐみ乍ら御飯をたべた。私達の前にはひつそりしたおかずがある。かうした父の說敎は一度や二度のことではなかつた。私はそれが大嫌ひであつた。自分だけがうんと重荷を負はせられてゐるやうな氣がして堪らなく憂鬱になる。泣虫の私の眼から溢れる涙は貧乏に生れついたのを怨しく思ふ涙で、決して病氣と戰ひ、生活と戰ふ父や、一年中手の平のざらざらしてゐる母や、小さな時から工場や會社へ勤めつづけてきた兄達への、感謝の涙ではなかつたのだ。

母は、一同の食事の終る頃に、私が明日から學校へ着て行く普段着が、餘りに汚れてゐることを思ひ出した。そして、次兄の古いかすりがあるが、あれではあまりひどいと思ふとつけ加へた。母はそれを縫ひ直して呉れようかと云ふのだ。父はその紺がすりを見た。それは大分色が落ちてゐた。父はそれを染めてやるといふ。母は危ぶんだ。紺がすりを丸染めにしては、變なものになつて了ふからだ。しかし父は受け合つた。

「子供の着るものなんか、さつぱりしてゐさいすればなんでも好いんだ。あした少し早く歸つてきて俺が釜で染めてやる」

父には、自分のやけた外套を染め直した經驗があつた。

狹い臺所は、釜から登る湯氣で白かつた。たすきをかけた父が、湯氣の中で動いてゐる。引窓を見上げると星がもう光つてゐる。

釜の下では薪がぼうぼう燃えてゐる。釜の中には黑い布と黑い湯とがにえたぎつてゐる。父の手首も黑い。（父は一生懸命になると、よく鼻汁が髭を傳つた。自分の眼鏡の蝶つがひを外して、細工をした時などの樣子が眼についてゐる）

さて、翌日のことだ。綺麗好きの母が、あれ程よく洗つた釜で炊いた、その御飯はうす黑かつた。うす黑い御飯から、もうもうと湯氣が上つた。

「赤の御飯のかはりだね」

誰かがそんな事を云ふ。染められた紺がすりは、まだ乾き切らずに竿にかかつてゐた。

幾日かの後、私はその染直した妙な紺がすりを着て、一年生の仲間に入つてゐたことであらう。

私も、「前途有望な少年」であつたのだ！

（大正十二年）

繪本

雨が降つてゐる。古風な機關車が眞白な煙りを吐いて止つてゐる。それは葱をふみ乍らきき耳立てた雄ん鷄に似てゐる。パラソルの骨のやうに、線路は停車場へたぐられる。お前の電車が一生懸命で驛へ走る。赤い陸橋を斜に拔ける。シグナルの色は次第に濃くなる。貨物車は海ぎはに幾筋にも列んで、雄ん鷄の來るのを待つてゐる。海の上にひろがる空は黃ばんで霽れさうに見える。海は、古いフィルムを一杯にほぐしたり、透かして見たりしてゐる。夕方の白さが驛を中心にして何處にも見える。

山の手の森の中の家に灯がつく。

驛の中は夕刊のにほひがする。車掌の手袋は汚れてゐる。停車場は顏を持つてゐる。

お前は其處からホテルへ行く。お前のタクシーは天燈蟲のやうに、ゆるい坂から山の手へのぼる。ホテルには日本人が澤山ゐる。澤山の日本人がほんたうにゐる。お前も黑い服で椅子に倚り、時を待つ。威張つた東洋人はみな毀れてゐる。日本人のお前がさう考へる。わざとお前は色々の事を考へる。結婚式がたうとう始まる。親戚は皆似てゐない。弟は若くて兄貴は年取つてゐる。白い長い卓子の上に、明るい酒と赤い酒と黃色い麥酒がおのおの小さな影をつくつて行く。ゑらい參觀人のある日の孤兒院の食事に似てゐる。お前は胸に白いナフキンを四角にひろげて行儀よく待つ。パンの脇に一人づつ日本人がゐて口を動かしてゐる。タル博士やフエザア教授は何處にゐる？　段々不思議な氣がしてくる。

お前のキスして別れた花嫁と、お前を知つてゐる大柄な花婿が並んでゐる。

お前はナイフとフォークで曲藝がしたくなる。伊勢海老が皿の上でにらむ。お腹がよくなると仲人が立ち上る。次の人が立つ、皆の體がほどけて御婦人は色をばらばら落す。

當り前な氣がする。不思議な氣がする。知つてゐる人がゐる。知らない人がゐる。子供の時に見た繪本の中の、魚の宴會が動き出す。

皆立上る。椅子がきしる。シャンパングラスを差上げる。シャンデリヤの光が激しくグラスへはいる。樣々な親指の腹の指紋のうづまきが一樣にお前へ擴がつてくる。眼まひがする「花婿よ、お前の鼻のちひさからんことを」

負けた西洋將棋がばらばらになる。

酒場で。お前はホイルバックの强い曲りに片腕かけて、味の濃い酒を時々取上げる。小さな舞臺に幕が下りたばかり、カップやグラスの觸れ合ふ音が、風のある日の椎の木林の中の、雀のさへづりか陽射しのやうに、人々の語り合ふ中から光る。お前の、テーブルの陰に重なつたエナメルの靴には、もう、うつすりほこりがたかつてゐる。

裏口の料理場の窓から投げられたすつぱい輪切のレモンが、ごみ箱の蓋について、その儘凍つて了ふ。鼠は暗がりでひげの根もとを兩手でかいてゐる。

お前はこんな隅の方に氣持のいい居場所を見付けたお前の機轉をほめる。落着いてのんでゐるお前の知らないお前の醉ひ。夜が更ける、踊り子はやつぱり寒むさうに見える。踊り子の腕の白粉がお前の黑い羅紗に殘る。

「お前の夢を見るよ」

一人の男を送り乍ら、うしろから女がさう云ふのをお前は遠くで鮮明りきく。男の手は一枚の札を握つて女の手にくるまれる。男は動き出す。ボオイがオーバーにくるんで戶外へ捨てる。女はチップを胸へながし込む。小魚を呑んだ黑い鵜のなまめかしさに似てゐる。女は舞臺に倚りかかつて煙草を喫ふ。何氣ないやうで、女は又小魚をさがしてゐる。兩ひぢを舞臺へのせて、まだ生きてゐる魚の動きを腕の中に見せる。お前は女の視線へ人差し指を上げる。にこりともせずに女はものなれた翼のゆるやかなひとあふりで、人々の間をぬけてくる。となりへ腰かけて、重くない女はつまらない。女は喫みさしの煙草をお前の口へはさませ、お前の胸の手布を拔いて已れの口のまはりをふく。强い酒がくる。

やがて醉つたお前が立上る。ポケットへ手を

入れて札を握る。お前の手は女の手の中にある。お前は憎む。

「お前は何が欲しい？」

女は酔つたお前を見さらしてから、

「いろさ！　いろを」そしてすかさず早口に突いてくる「お前は？　お前は何が欲しい」

「俺か⁉」

お前は女を力一杯突飛ばしたい。

「俺は生きものを！」

「あばよ！」

扉戸のすつかりおりてしまつた街をたつた一人お前が歩いてゐる。遠い遠い街角に人影が見えるのだが、すぐなくなつて了ふ。街だけが殘つてゐる。この扉戸の中には冷たい胴體模型が立つてゐる。この扉戸の中には冷たい眼鏡と時計がある。この扉戸の中には堅い腸詰や蒸燒肉がつら下つてゐる。ドックの船の腹のやうに、窓のない商店やビルディングがならんでゐる。お前の息は白く、色々の物かげをふんで行く。

この都會を離れた夜汽車は、やきとり紙の火先きのやうに、もうぢきに次の町へつくだらう。

お前は花嫁と花婿を祝福しなければいけない。

お前はうつむいて歩いてゐるうちに、いつか鋪道の四角いしきりに吸込まれて了ふ。眼が離せなくなる。四角い鋪石は無限に四角につながる。お前は駈けだす。

生きものを！

しきりは網になつてお前の足にからんでくる。倒れる。お前は額を打つてその儘動かない。タキシの捨てていつた油染んだぼろのやうだ。お前は凍つた鋪道にうつむきに倒れ、薄荷の匂ひをかいでゐる。お前は鼻血を澤山出したのだ。

人けのない何處かの店の、栓を締め忘れたフアウンテンから、どんどんソーダ水があふれてゐる。

「花婿よ、お前の鼻の小さからんことを！」

街燈と並木が出來るだけ背伸びをしてゐる。横顔のやうにぢつとしてゐる明暗のはげしい街なみ。お前にはもう何も感じられない。お前はお前自身の中に浮んでゐるのを樂しんでゐて、お前は今夜はもうお袋の家へは歸れない。こんなに靜かな街の中で、お前はこの儘こつそりと死んで了ふことも出來るのだ。

さうだ、ほんたうに、お前は死んで了ふことも出來るのだよ。お前の耳よ聽け。

畜生！　どこかに何かがゐやあがる。

（昭和五年二月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

手袋のかたつぽ

私に多少の繪ごころさへあれば、一昔前の風物を、たとへば櫛の齒のやうな窓を持つ蕎麥屋の店、町角に一寸傾いで立つてゐた紅殼色の自動電話、路地の埃箱の下から萌えた小豆や西瓜の嫩葉、さては玩具箱の底から引出したやうな、外濠線と街鐵ふたいろの古風な電車などと、思ひ出すまま心おぼえに描いて置けば、それで氣のすむことなのだが。

昭和十×年十一月一杯を、私は滿洲見學に費して、それから北京へ入つた。旅行の目的は滿洲の見學にあつて、北京に寄れたのは全く望外のことだつた。久振りに團體から放たれた氣分もあつて、眼に映るもの耳に入るものを、その儘土產にするつもりで十日ばかりを其處で暮すことにした。

二日目に、義兄の紹介狀を持つて、さる開發會社へ×さんを訪ね、大層お世話をかける事になつた。宿舍までも親切をうけて、北京飯店からその公館の一室に移したが、それから二三日は同じ屋根の下に起居し乍ら、多忙な×さんとはゆつくり顏を合はすこともなく、晝間は祕書の×氏の案內で北京のあらましを見物した。

明日あたりから一寸北京を離れ、都合よく行けば大同から更らに包頭まで行つて、再び此處へ戻つて來る——と思ひ立ち、翌る朝は早目に眼を覺したが、窓の外はすつかり曇つてゐた。氣のせゐか、曇つた空は日本よりもうす赤く濁つてゐる。相當溫度も低いらしいが、躾けの行屆いた下男が、今朝も私の眠つてゐるうちに、煖爐を燃やし付けて呉れたらしく、ベッドに起上つてみても寒いと云ふことはない。空罐を敲くやうなかん高い音に續いて、間のびのした呼び聲が、土塀の向ふを通り過ぎて行く。なんのことだか少しも分らないが、私は下駄の齒入れをすぐ思ひ出してゐた。寢臺の上で、繪葉書を二三枚書いた。

窓際の棚に、質の良い、部厚な眞鍮のサモワルが置いてある。煙草に火をつけて何氣なく其處へ眼がゆくと、手入れの屆いた胴のふくらみの邊の輝きが、しきりにちらちらする。庭へ小鳥がきたなと、もの珍しく眼を移したが、小鳥ではなく何時の間にか雨が降つてゐた。眼を覺した時から降つてゐたのだらうか。私は再びベッドへ體をのばして、知らぬまにうとうとしたらしい。

「先生、先生」とボーイに起されてゐた。×さんから電話といふことだ。

「出掛けに一寸覗いたが眠つてゐたので——、寒くなければ、×君を迎ひに上げるから出ていらつしやい。初雪の中で烤羊肉を御馳走しよう。ここでは初めてでせう?」

「初雪?——雪になりましたか」

「そつちは降つてゐないの」

「いいえ、氣がつかずにゐました」

うす暗い電話の在り場から、明るさをうかがふやうにした私の耳に、×さんの中老らしい穩やかな笑ひが聞えた。

「すぐ仕度をします」雪と聞いて、旅人の心がはずんで來た。

×君が迎へに來て呉れた。成吉思汗鍋は、東安市場の屋上にあるのださうで、一時に、其處で×さんと逢ふといふのも好都合であつた。土產物も少し求めて置きたいと申出た時、「それでは、さしづめ東安市場へでも、そのうち御案內しませう。一寸したデパートと、淺草の仲店を一緒にしたやうな所です」と×君が云つてゐたのだ。

運轉手の鼻の先きで、扇形にゆるく忙しく、硝子の雪が搔かれる。おぼえてゐる町角。通つて了つてから、ああさうだつたと分る丹塗の門。商店の二階の招牌の裏に取付けてあるらしい、開けつ放しの擴聲器が、町へ響き渡らせる歌曲。學校が退けた支那の小學生達が通る甎の塀つづき。——車の內はほんの少し大蒜のにほひがする。雪降りの古い都會を、私は飽かず眺めた。

人通りは多いが、さして廣くはない町筋に來て車は止つた。一見通り拔けの出來る路地とも

見え、東京大阪の問屋町の裏口や裏通りにも似てゐる、積上げた商品の間の土間を行くやうな感じの横町を、私は×君に隨いて入つた。それが東安市場の幾つかある出入口の一つであつた。狹い通路の兩側に、靴屋や雜貨屋のウインドが續く。電燈をつけたうす暗さの中に、日本の靴屋と異つた處もなく見えたこの店も、陳列棚を覗き込むと、どの靴もどの靴もひどくなが細く、間延びのした處が中國臭い。

やがて私達は市場の中央に出た。三間に七間程の長方形の廣場に、骨董とも古道具ともいへる種類の品物を陳べた店があつて、此處だけは大屋根の硝子の明りとりから、雪の日の光りを受けてゐる。この長方形を中心にして、四方へ通路が延び、それぞれの通路の兩側に、色々な店が並んでゐると思はれた。そして、それらの店々の上に、これから招ばれる料理店もあるのであらう。

――こんな風に書いて來て、實は私の記憶のはずかしい程にうすれてゐるのを知り、思ひ違ひや一人合點をうまく繼ぎ合せようとばかり焦つてゐるのだが、それといふのも、この骨董屋の、種々雜多な品々をもの珍しく見て廻り乍ら、私の踏んだ通路の土の、永い間人間の足で踏みかためた、落着いた程よいかたさがしみじみ懷しく、懷舊の情を私の胸に沸き上らせたと書いて了へばそれでよいのだ。氣にかけて、人から借りた寫眞雜誌の東安市場風景は、自轉車置場の自轉車の林や、人だかりした露天の曲藝師、日本人の一番お氣に入りの場所といふ說明があつて、買物してゐる和裝婦人の大寫しとか、さては洋杖を小脇の支那紳士が、古書の店で森閑と頁を繙いてゐる處とか、私の追憶の擴がりはこそすれ、お前の思つてゐる通りだと證明してくれるものはなかつた。――私は眼に浮ぶ情景を信じてよいのだ。

時間が來て、私は×君に從いて東來順の階段を上つた。×さんも、間もなく小柄な姿を現した。たつたいま降りかかつた雪を、黑のソフトにも外套にものせ、やあと云つて、私達の前に腰を下して帽子を脫ると、長めに丸刈りにした頭髮も胡麻鹽であつた。その×さんの背後へ給仕が來て、親しげな挨拶をした。椅子に寄り乍ら頭をうしろへ振り向け、給仕の顏を見上げるやうにして、×さんもにこにこ何かうけ答へた。

初對面からまだ一週間にもならず、口の重い人で、ものの半時間とはまとまつて話もしたことのない×さんに、かうして向ひ合ふと、年長の舊い知人と逢つてゐるやうな氣持になるのは、こんな姿を傍から眺めてゐる時に、次第に私の心を占めて行つたものであらう。

「車はあつたかい」

「はあ恰度××さんが歸られたので」

×君はいつも調子の變らぬ眞面目さに、若々しい學生生活の餘韻を殘してゐた。

いまは、日本では殆んど見られなくなつた角刈りにした給仕達が、彼等の服の伸びやかさもあつて、何處かひらりひらりとした感じで、卓から卓へ忙しく料理を運んで廻る。幾枚かの皿小鉢を、梅鉢の紋のやうに客の前へ並べて行くのや、ながくて眞直ぐではない箸の、ざらざらと卓に置かれるのまでを、私はたのしく眺めた。

「私も烤羊肉はこの冬初めてなので、御禮をいはれるどころではない。雪を見たら、すぐ君を引張り出すことにしましたよ」

×さんが、ぽつりぽつりとした口調でさう云つた。

給仕が迎へに來て三人は立つた。廊下の突當りの扉を開くと、ちらちらと降る雪空の下の屋上へ出た。鍋の下の仕掛は忘れて了つたが、成吉思汗鍋といふ鍋らしくない鍋は、直徑一尺餘の七輪のおとしを炮焙を伏せたやうに中高にしたもので、赤々と火を透かせてゐた。帶の高さほどのこの鍋を圍んで、粗末な緣臺が二三脚置いてある。これへ片足かけて、出汁に浸した羊の肉を燒くのが法だと聞いた。錫の小德利に入れて、燒酒そつくりな酒を添へてくる。ままごとに使ふやうな小さな杯で、合間合間に含むと、口中の脂が綺麗に消えた。

鍋に就ての問答が一應すんだ處で、×さんが土產物はあつたかと云ふ。

「ええ、二色三色求めましたが、それよりも、あそこで子供時分の事を思ひ出しました。とても昔の勸工場に似てゐるやうな氣がしまして」

私はまた先刻の土間の踏み心地や、夜のやうに電燈をつけた店並みを甦らせてゐた。

「ほお、勸工場。なるほどなあ」×さんの橫顏

が一寸微笑んだやうに思はれた。
「×君は知らんだらうね」
「はあ、私は――」
「君は」と私へ向いて「何處の勸工場を知つてゐる？」
「東京の神田で育ちまして、駿河臺下の東明館がすぐ傍でした」
「東明館なら僕も知つてゐる、學生時代によく行つたものだ」
「學生時代といひますと」
「駿河臺のニコライ堂に附屬して、神學校といふのがありましてね、其處にゐました。不思議な處に居つたものさ」
私達は、思ひ浮ぶまま暫く昔のあの邊の事を語り合つた。肩の雪を、手巾で拭ひ乍ら再び屋内のもとの卓子に歸つて、更らに二三種の料理が來、甘い支那菓子でお茶を喫んだが、その間もお互ひに思ひ出しては昔話になり、×君をぼかんとさせたやうにおぼえてゐる。
會社に用事を殘した×さんを送り、その車で私は公館へ歸るのだが、昨日北海公園の白塔から見下した街の姿にも、紫禁城の多彩な甍や壁、巨きな燈や深い石甃の上にも、うつすりと積りはじめた雪を想像した。すると、私はまたいつの間にか、聖橋からニコライ堂へかけての雪景色や、降りしきる雪の姿を宙に浮き出して、神保町通りを進む救世軍の、提灯の灯を見てゐた。

勸工場といふ建物は、榮螺の殼の伏せたのを、大きく煉瓦づくりにしたとでも云ふのであらうか。
三十年前の私どもの小學讀本にも「勸工場」といふ一章があり、朧げな記憶をたどると、現在の百貨店と同樣な職能を持ち、その名の通り日常品工業發達の一助を目的として設置されたといふ意味が、館内を見學して歩いてゐる風な文書の中に、記されてあつたと思ふ。
新橋上野の兩博品館、神田小川町の南明倶樂部、本郷の何と私の知つてゐるものだけでも數へられるし、地方の都會にもあつたものだと聞いてゐるが、此處で大きな榮螺の殼と云ふのは、その頃の電車の車掌が「駿河臺下東明館前」と告知した、その東明館のことだ。
小川町通りから一寸入つた、五十稻荷の脇にも南明館といふ勸工場があつたさうだが、深夜に火を發して消滅し、その折入口の大扉が閉されてゐた爲に、住み込みの商人達が多勢燒死したといふ話を、子供心に怖しく思つた記憶がある。私がものごころ付いた時分には、已に新築して同じ名の貸席になつてをり、琵琶が大層流行つた頃で、有名無名の演奏會が連夜にわたつて此處で開かれた。
そして、後年――私が十七八の頃、東明館も亦自火で燒失し、それ切りになつて了つた。
午前一時頃に東明館は燒け落ちたが、錦町にあつた東京最古の活動寫眞館、錦輝館の火事も眼のあたりに見た。これは白晝のことであつた。

神田と云ふ所は、學校と古本屋と火事の、實に多い所であつた。駿河臺の明治大學記念講堂も新築間もなく烏有に歸したし、神保町に聳えた救世軍本部も燒けた。この他「神田の大火」といふものに、私達はいつたい何度出逢つてゐるだらう。入學する間もなく普請にかかり、三年經つて出來上つた私の小學校は、落成式を濟ませて一週間すると灰になつて了つた。皆んなで教室を間借りした西小川町の學校の方も、その後燒けてゐる。殘つた所は、――殘つた所今度こそ震災の劫火が、ひと舐めに持つて行つた。
子供達が電車好きなのは今も昔も變らない。私達は、その頃「街鐵」と「外濠」の判別出來ることを得意としてゐた。東京市の電車は、當初二つの會社が經營し、線を異にして競走したので、それの名殘りの、車體の相違を指して云つたものか、對立當時の線の方向をその儘言ひ慣はしたものか、それともその當時まだ合併してゐなかつたものか、はつきりしないが、電車の型から、私は大層外濠贔屓であつた。外濠は胴を明るい海老茶色に塗り、きちんと古風な帽子をかぶつた感じで、海老茶の他の處は白に近い黄色が塗つてあつたと思ふ。街鐵の方は車體に細かい筋が澤山あり、なんとなく町人めいて、兩方とも車前に付けた金の救助網であり乍ら、この方は前掛けのやうな感じがした。外濠が上品でハイカラなのに、街鐵はがさつでわめき乍ら走つてゐるやうな感じであつた。ボギー車の初めて通るのを見た時、少しでも新しい型の電

車を發見した時の感激と得意さも、なつかしく思ひ出される。それから、青い白墨の色に塗つた架線工事用の、山車に似て大小二つの車輪を持つた櫓は、急の故障に備へて、電車道の脇によく置かれてあつたもので、工夫の眼を盗んであれの梯子を上り、頂上の四角な工事臺へ跳び込むと、いろいろな針金の切れ端しや金具なぞが捨ててあり、方々見下すことも出來て、「冒險」としては隨一のものだつた。

その外濠と街鐵が駿河臺下で交叉する、十字路の南角が、入口の前に僅かな廣場を備へた煉瓦建ての東明館だ。

御茶の水の方から坂を下つて來た外濠が、井桁に組んだ交叉點の線路上を通過する時には、何と云つて動搖するか、小川町の方から來た街鐵が同樣の場合は如何にと、もし仲間に訊ねられれば、それは一方は「駄句駄句、駄句駄句、脫訓」であり、一方は「脫訓、駄駄駄駄、脫訓」であるといふ風に、身振りごと、仲間達の前で整然と區別して口答しなければ輕蔑されることになるし、ボギー車が通るやうになつてからは、更らにそれは修正されるのであつたが、それらの觀察も論議も、たいていは東明館の前に集つて行はれたものだ。

交叉點でポールの外れなかつたのを確かめると、車掌は必ず鞄をお腹の上へ向けなほして、切符を切りに車内へ入る。電車はのつそりと、駿河臺のゆるい勾配をのぼり始めるのだが、其處を覗つて跳び乘りを試み、仲間に敬禮などを一寸して見せ、一段車掌臺へ上つたりして餘裕を示し、そろそろ車掌の戻つて來る頃を見計らつて、今度は跳び下りをやる。こんな事がひとほり出來ないと、その邊の仲間では幅が利かないのであつた。金物を線路の上にのせて置いて、それの轢かれる狀況をしやがんで觀察したり、かんしやく玉を三つ四つ並べてきて、物蔭に潜んで電車の通過を待つてゐたり、悪い事はみんなやつた。明治の末から大正初年頃である。

勸工場は不思議な建物だ。樣々な陳列品を見乍らくるくる館内を廻つてゐるうちに、またもとの出入口へきて了ふ。知らぬ間に二階へ上つてゐるといふ式のものも在つたさうだが、東明館は平建てであつた。煉瓦の門の入口を入ると、館内には何時も電燈がともつて居り、塗物類や化粧品のにほひの一緒になつた、勸工場獨特の、ひんやりとした空氣が我々を裏む。永い間に、自然と人に踏み固められた幅四五尺の土の通路は、風の吹く日のお濠の水ほどに、滑らかな不思議なでこぼこを持ち、ゆるやかな角度で絕えず圓をかき乍ら、奥へ奥へと客をいざなふ。通路の兩側の壁が陳列棚で、片側には更らに四五尺幅の陳列臺が續き、品物の種類がかはる毎に、店番が坐つてゐた。その店番が小椅子を臺にして、背延びして瓦斯のマントルを燃やしてゐたやうな印象が、ふと浮んで來た處を見ると、館内を照してゐたのは、或ひは電燈ではなかつたかも知れない。ものの十五分もすれば、館内を一周して、もとの入口の處へ出て來たものだらうから、奥深い譯はないのに、かうして追憶してゐると、大きな榮螺の中の渦卷を、幾度か幾度か廻つたやうな氣持がする。館内で通路が十の字になつた處もなく、考へれば考へる程不思議な建物になつてくる。

店番の姿も何かの挿繪めいて思ひ出され、土間へきちんと下駄を揃へて、膝蒲團を當て、手焙りの上で新聞を讀んでゐる老人とか、おかみさんがひつそりとアルミの箸の音をさせて、辨當を食べてゐる書過ぎの館内とか、勸工場といふものが、普段はあまり繁昌してゐたとは思へないものばかりだ。

その店番と店番の間を、その人達だけが利用する、木戸附きの細い路の横についた處が幾個所かあつた。お客の通路から横町へ入る勘定になるのだが、いつぺん是非此處が通り拔けて見たくて、思ひ切つてやつたらば、ひよいつと出口に近い玩具屋と文房具屋の間に飛び出して、とても新鮮な氣がしたものだ。

私共が、この大榮螺を活用しない譯はなかつた。探偵ごつこの一番たのしみは、此處へ逃げ込むことにあつた。探偵ごつことは、白狀すると泥棒ごつことも云つて、少年一統のうちでも頭株のものが兇悪な悪漢役に廻り、より年弱わの少年達が、これを苦心して逮捕する遊びで、全く活動寫眞の悪影響であらう。

夕方から夜にかけて街が雜踏する頃に始まる遊びであつて、駿河臺を驅け下り、電車道を突切つて、悪漢は大概東明館へ跳び込む。度び重

なつてゐるから、探偵よりも店番の一喝を極度に警戒し乍ら、右廻りに逃げたり左廻りをしたり、ひよいつと木戸を抜けて姿をくらましたりする。駄菓子屋に賣つてゐる鑄物のピストルを兩方が持つてゐた。辮髪の支那人みたいな顏があつて、その口の處へ紙の煙硝を詰める、引金を引くと口が締つて音を立てる仕掛けだ。表猿樂町通りの名物に、五錢均一十錢均一といふ、店内の品物は總て同値といふ店が何軒か並んでゐたが、二十五錢均一の店には、ニッケル鍍金の素晴しい六連發ピストルを賣つてゐて、そいつを持つてゐる裕福な探偵もあつた。

それ程の東明館であり乍ら、私は遂に此處で買物をしたおぼえがない。中元、歳末の大賣出しに、福引がして見たくてならず、母にねだつたことでもあるのだらう、そんな時の母の言葉とおぼしく、勸工場で買物をするのは、田舍者か支那人だ、と云つたのを思ひ出す。なるほど此處一番の上得意は、中國留學生であつたかも知れない。神田も殊にあの邊は、中國人學生の本據だつたから、特に東明館が利用されたといふ譯ではなからうが、耳飾りをゆらゆらさせた纏足の中國婦人が、品物を選りだしてしきりに値切つてゐる光景なぞも、思ひ出される。

お盆と歳末の各十五日間の福引大賣出しは、東明館の書き入れ時だ。館前の一寸した廣場に福引所の小屋が立ち、簞笥、鏡臺、支那鞄、茶簞笥といつた大物を背景に、厚化粧した婦人が緋毛氈の上に四五人並ぶ。端を赤に青に紫に、買上額に應じて等級を色分けにした籤を、煙草盆樣の箱へそれぞれ一杯にして、婦人達は客を待つてゐる。その前へ青竹を二本横に渡した手摺りが出來、抽籤券を持つ人はこの間を通つて赤籤青籤を引きにくる。大當りの時は、印半纏の男が、小學校の小使さんが鳴らす大鈴を、がらんがらんと打振るのだ。

館の入口の上の古風な露臺には、紅白の幔幕が張りめぐらされて、そこへ朝から五六人の樂隊が詰め、オーボエの調子を、ひよろへろひよろと合せたりしてゐる。曲目は六段とか、越後獅子とか、天然の美とか、それでなければ軍艦マーチくらゐに限られてゐて、一日中それらを繰返すのであるが、歳晩の空つ風に乘つた時なぞは、隨分遠くまで、ちぎれちぎれに聞えた。

東明館の前を、ちよつと駿河臺へ上る右側に、美しい少女が給仕して烏龍茶を喫ませる店もあつた。その一二軒先きが基督教中央福音傳道會で、毎夜六七時頃には、二つ程の大提灯を先頭に勢揃ひして、小川町から五十稻荷の緣日を拔け、神保町の夜店通りを九段下邊り迄、大太鼓を敲いて練つて歩いたものだ。今夜はもう外へ行つてはいけないと、足止めをされた夜なぞは、東明館のここを先途と吹きならす大奏樂に、づん、づん、づんと打響く救世軍の大太鼓の遠音が交錯して、賑やかさを慕ふ子供心をかきむしつたものだ。

（わが惡童連は、この福音傳道會をも繩張りとし、毎年十二月の月に入ると、此處の日曜學校へ通ふものが俄然增加した。クリスマスの贈物が目當ての計略であつた。）

お盆の印象は殆んど殘つてゐないが、隣り町から順に店先き軒先きへ杭が立ち、松と竹とを車に山と積んだ蔦の者が、口から長い釘を一本つまみ取つて、杭から杭へ横木を打付け、腰の束から繩を拔取つて、角松を手際よく結びつけて行く端から、正月が近付くやうな氣がしたものだ。學校が退けると、家へ鞄を投げ出すやうにして福引所へ出かけ、太くてつるつるした青竹の手摺りに靠れ、或ひは一回轉する機械體操を試み乍ら、抽籤の模樣を樂しむのだが、福引係の女達も、やがて思ひ思ひの日本髮を結ひはじめ、結ひ馴らして、春を待つ姿になるのだつた。

その夜思ひがけなく、支那服に寛いだ×さんが、ウイスキーを提げて、私の室を訪れた。

「東明館で、昔話を思ひ出しましたよ」と、眼尻を皺にして、私にグラスをすすめる。

五十代も殘りは少い筈だが、遂に獨身で、支那人の下男夫婦を相手に、永年北京暮しをしてゐる、事業の方では指折りの人と、東京を發つ時に義兄から聞いてきたが、かうして二人きりで煖爐を圍んでゐると、中老の人の孤獨さが身の周りに滲んで來るやうに思はれ、それを支へる落着いた氣品と、人柄の確かさを感じさせるものは、肉體と心とを一つにした自づからな清

潔さから來るのであらう。兩の掌で包んだホットウイスキーのカップを、時々舐めるやうにして語りだした。

「神學校を選んだのは、給費の點もあつたが、ロシヤ語がやれるといふ事でしたよ。鄕里の傳教師の紹介で、二十の歲に東京へ出ました。

中學二年の時に私と二人切りの暮しをしてゐた親父が死んで、代用教員になつた。叔父の家に寄食して、『白樺』を愛讀したものです。ロシヤ語をやらうと決めたのも、トルストイが與つて力があつたといふ譯だが、傳教師になるつもりはまづ無かつた。一年と一寸世話になつてゐる間、語學は一所懸命でした。ロシヤ語のほかに英語は自修でやつたが、その英語と文學が嵩じて——神保町のある古本屋で盜みをして了つた」

カップを小卓へ置き乍ら、×さんは橫顏を見せたが、その手で煙草をとると、いつもの慈顏であつた。

「現在丸善の神田支店になつてゐる、あそこは昔中西屋と云つて、やはり洋書を主に賣つて居ました。周作人の『東京の本屋』といふ隨筆にも、——下宿からは丸善よりもずつと近かつたが、どうもあまり行く氣になれなかつたのは、小僧があまりしつこく附いてまはる爲だつた。云々とあつて、あの頃では相當な店でしたがね」

「私もおぼえてゐます、とても綺麗な、小型の子供の本を、シリーズにして出版してゐました」

「その中西屋の棚で、ウイリアム・ブレークの畫詩集を見付けてね、その時の歡喜と云はうか驚異といはうか、——原色版の鮮かさが、ぱつと咲きひろがつた時は、ほんたうに絕叫しさうな氣持だつた。その日は全く夢中で、慄へ乍ら寄宿へ歸つた、勿論買つてかへつたのぢやありませんよ。その時の金で十二三圓もしたものでせうかな、買ふとか買はぬとか云ふ値段ではなかつたし、それどころか、手にとつて見た喜びが大きいので、自分の物にするなぞといふ氣持は全然なかつた。白樺で、柳といふ人の紹介文と、寫眞版を鄕里で見てからのブレークなんだ。柳といふ人の紹介文は、不思議な情熱を持つた、しつこい文章でね、その白樺は貧しい辭書類と一緒に、寄宿へ持つて來てありましたが、嬉しくて嬉しくて、それから中西屋へ日參した。本屋の店番といふ奴は、周作人ではないが虎視眈眈、實に不愉快なものだが、それ處ではない、毎日行つてそれだけ二十分位見て出て來る。寄宿へ歸つて見て來たものを思ひ出さうとすると、記憶がさだかでなくなる。そんな筈はない、あれ程よく見て來た繪なのだからと思ふ。すると明日の中西屋行きが矢も楯もなく待ち遠しい。なんでも、その本はエ・スタデイ・オブ・ヒズ・ライフ・アンド・アートウワークとか云つたと思ふ。おかげで『天帝』の太古の日の色や、若若しい心の歡喜そのものを表した『よろこばしき日』の明るさ、さうかと思ふと『咆哮するロス』の激しさ、版畫では『怒りて星を分けゆく道』といふ風に、今でもはつきり憶えてゐる。山宮といふ人の譯詩集もその頃出たものだらうか、生意氣に感じが足りないなんて、勝手な譯に自分でなほしたりしたものです。

今になつて見れば、ブレークといふ人は、素晴しく無垢な藝術的な處と、狂信的な、概念めいた、謎めいた所があつてね、好きな處と好きになれない處がはつきりするのだが、神學校の給費生生活では、こんなに潑剌と精神の美しさを描き、歌ふ世界があるのだと、感動が强かつたのでせう。著者のいふ『精神的』なものの同義語が、すべて『西歐的』なものだつたんですよ、ブレークは私にとつてそれのシンボルみたいなもんでした。

——處が、その畫集が、中西屋の棚から消えて了つた。私が見つけてから、一週間もたつて居たらうか、いつものやうに午後其處へ行くと、無いんですよ。

呆然と立つてゐた。そのうちに、むらむらと腹が立つて來る、なんとも云へず落莫たる氣持がしてくる。——誰かが買つて行つたのだと、初めて思つた。買ふ、買ひたいといふ氣は初めから無かつた、ひとり合點で、だから誰も買ふものとは思はなかつた、そのままいつまでも其處にあるべきものと思つてゐた。それが突然、何處の誰とも分からぬ奴に持つて行かれて了つた——。今になつてみると、僕が餘りしつこく一つ本を見に來るので、意地の惡い店員が、或ひは何處かへ隱して了つたのかも知れないとも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com